

## 『35周年を迎えて』 会長 中山 明 弘

「中国語を学ぶ会」は35歳を過ぎ、なんとか皆さんの努力のお陰で生き続けております。

35周年記念のイベントの一環として、インターネットのホーム、ページを立ち上げることが出来ました。

中国留学体験ツアーの計画もありましたが、会員の減少が続き会員募集活動に追われ「城山」詩の如く「孤軍奮闘し吾が剣は既に摧れ、吾が馬は斃る」で会員のみなさんに中国語の教室の時間短縮一月4回を各クラス全て3回とし、又若山、李両老師の謝礼金を削りボランティア的に協力願って、この一年を生き抜く計画であります。

なお退会された方々の後任役員に別表の方に役員、幹事をお願い致し総会で選任決定致しますのでみなさんよろしくご協力をお願いします。

この会が35年間も続いているのは先輩諸兄が会を支え続けた力と汗の賜物と現在の役員及び幹事の会へのボランティア的努力と会員、皆様の協力があればこそだと信じます。

中国での日中国交正常化35周年記念式典に日本から多くの方々招かれた。

その1年前 2006 年 11 月 12 日孫文生誕140周年の記念式典に日本から2名が招

かれ出席した。小坂哲郎さんと宮崎露荃さんです。

孫文については辛亥革命で中国の父とも言われ皆さん百も承知と思いますが、我がクラスの自習時間にビデオ「宋家皇朝（宋家の三姉妹）」を二回程鑑賞した「宋庆齡」と共に描かれていたので判ると思いますが2名の出席者の「小坂哲郎」さんは経済的に孫文を応援した「梅屋庄吉（トク）」さんの親族であり「宮崎露荃」さんは心の友として孫文と辛亥革命を支えた「宮崎滔天（寅藏）」さんの孫です。物心両面で辛亥革命を応援した人達を忘れず式典に招く信義・恩義を重じる国なのです。

冷凍ギョーザで日中間で問題になっておりますが、新しい中国は変わったとは言え（我々日本も変えていますが）底に流れている国民性は変わってないと信じます。

北京オリンピックを見に又、オリンピック後の変わった北京を見る旅行を「中国語を学ぶ会」として 40 周年記念に向け当会からも記念式典に出席する人を送るべく今から全員で自分が会の代表になるのだと信じ？中国語を学ぶことを通し、日中友好に努め会の一層の発展と共に自身の語学力を高め、両国の知識をも深め日々精進し明日を目指して頑張りましょう。

## 別 表

退会の方々長いこと、ご苦労さんでした。

役	新担当者	退会者
副会長	谷川 功 (イベント担当・火曜)	西川誠二 (木曜)
〃	渡辺敏行 (ホームページ・会長補佐・火曜)	
会計監査	小島享子 (木曜)	野中矩仁 (木曜)
火曜役員	山口裕子 (火曜)	前田正裕 (火曜)
木曜役員	今井敬子 (木曜)	久玉律子 (木曜)
木曜役員	梶浦貞夫 (木曜)	福田慎二 (木曜)

## 私と中国語との出会い

星期四班 佐藤真知子

私が中国語を学習しようと思ったのはずいぶん前のことになります。

というのは私の夫が急死して、心が空っぽだったとき、何か今まで出会った事のない物にふれてみたい、と思ったのです。

最初はラジオでした。面白くない発音を二年ぐらい一人でぼつぼつ聞きました。聞いたことがない音にびっくりしながら続けて行くうちにだんだんつまらなくなりました。誰かに共通の話題で話したいと思うようになりました。それで公民館に行って中国語を習いだしました。覚えるのも大変だし、発音も分からなくて困りました。最初のうちずいぶん頻繁に先生が替わられてとまどった時季もありました。



今のように皆和気あいあいと学習できるのは本当に有り難いと思っています。この独特な音階を持った言葉の虜になってから現在もこれからも、楽しんで学習を続けたいと思っています。

## 楽しく学べてわたし幸せです！！

星期四班 小島享子



「中国語を習ってみようかな」と考えている皆さん とにかく楽しいクラスです。

年齢幅も広く 老若男女 問わず中国の文化や新情報などをふまえて 興味ある授業で あっという間の2時間。

いつまでも 勉強し続ける事は 頭や細胞にとって アンチエイジング!!

覚えた会話文は どんどん声に出して自分のものにしたいな……できれば本場中国へ旅行して使ってみたいな……というのが私の夢です

先生がとても優しい方なので 一度 体験 見学にいらして 雰囲気味わってみてください。

井上清の「敦煌」「樓蘭」「蒼き狼」等中国の小説を読んでいつか行ってみたいと胸に秘めてはいたが当時中国旅行は一般的でなかった。二〇〇一年思いもかけず、夫が仕事で江蘇省無錫市へ赴任することになり五年間の単身生活で私の中国通いが始まった。

初めて中国へ行った時の事は忘れない。なにしろ海外への一人旅は初めてであったし当時は米、味噌など持って行き荷物はいつも三十キロに近かった。浦東空港に着いて人の多さに驚き、出迎えの人の波に不安を感じた。夫と会えなかったらと思うと心臓が破れそうであったが幸いに迷子にならず中国の人達の熱烈歓迎を受けて私の第一歩となった。中国の人は歓迎の時大きな花束を用意するらしく、あちこちで見かけた。私は新婚旅行と勘違いして皆に笑われた。三回目からは夫の送り迎えも止め、本当の一人旅が始まった。

中国の高速道路は広いうえに皆スピードを出し乍らジグザグと追い越し、追い抜くのでホテルに着くまでハラハラ、ヒヤヒヤで疲れる。日本人ではとても運転出来ないと思う。いつ通っても一つ二つの事故を見かけるが私は幸いにも一度も事故に会わなかった。考えてみれば高速道路を一般の人が横切ったり中に入ったりしてるのだから……。

でも今の季節は楽しみもあった。上海から

蘇州の間に一面の菜の花畑が広がり、それは美しい光景であった。まさに黄色い絨毯だ。でも年々菜の花畑も減少してらるらしい。上海―南京への高速道路も整備されて来て時間も短縮され楽になったと思う。住居であるホテルの三十六階の部屋からは市内が見渡せ、曲がりくねった運河は古い船が荷物を積んで列をつくり、古い住宅の屋根やビル群、天気によっては遠くに太湖の水面がキラキラ輝いていたが、空はどんよりとして空気の汚染が始まっていたのかも知れない。道路も街の中も不潔だったがサーズのとあたりから大掃除になったと思う。

買物はスーパーや市場を利用したが生きた動物も多く、肉は卓球台のような台に塊りのままで必要に応じてカットしてくれる。日本の様に部位別にカットされていない。話せないの身振り手振りの買物で、日本では見慣れない野菜も多く、いつも買う店のおばさんに料理方法を教わったり、ネギや生姜のおまけもしてくれたり話せないながら楽しかった。

当時の日本人の奥さん達は定期的に上海や蘇州へ買い出しに行き、日帰りの旅行気分を味わい帰りは家族のためにぎりぎり寿司や焼き鳥を持帰った。今では週に数回生協が届けられるので楽になったという。七年前は子供を連れての人は三、四人だったが最近の子育てをしながら習字や絵、語学に二胡を学びながら生活を楽しくしているようだ。

私はこの会で学んでいるものなかなか話せずには終わらなかつた。無錫弁は北京生まれの友人にも解らないくらい方言が難しかったらしい。この五年間で変わった事といえば古い建物が壊され新しいビルになったこと、中国の歴史ある四合院みたいな建物が市街からほとんど少なくなることは寂しくまたもつたに思える。ビル工事も道路工場もスコップやツルハシ、トンカチ等で壊していたし、ビルの建物の足場は細い竹で組まれていて、今日日本では見ることの出来ない光景でもある。それから信号が増えたこと、初めの頃信号も少なく道路を横断するのも大変だった。車の間を上手に渡るのだから私には命懸けであった。ちゃんと信号を守るようになったらどうか？電車の切符も事前に購入しておかなければ当日行っても乗れなかったが、今は新幹線も走り乗車券の購入方法も変わったかも知れない。あの頃指定席であるはずなのに乗ってみると他の人が坐っていたりと戸惑いも多かったが慣れてみるとお互いに席を変えてもらったり自由もきいた。今でも通路にはスイカや柿の種子が乱らばっているだろうか。お湯を配っていつでも熱いお茶や麺が楽しめるのだろうか？中国語はなかなかマスター出来ないがまだ、敦煌へも黄山、昆明へも……夢は果てしなく続いている。北京オリンピックの後、どのように変わるであろうか、確かめる意味でも是非行きたい。

## 「欲窮千里目,更上一层楼」 星期三班 中山明弘

水曜クラスに編入し先輩諸兄と共に学び実感的に感心したことがあります。日本棋士の七冠を達成した羽生善治（現在二冠）が言われる“一番大切な才能”を皆さんが持っておられることです。

その才能とは“何才になられても勉強を、学ぶことを続けて行く能力”です。

学び続けること。5年～7年はザラです。70歳を超えた高令で寒い雨の夜も遠くからクラスに出席して中国語を学んでいるのです。

1年や2年では判らないのが当然です。語学に王道はありません。そこで私は思います。特に中国語を学び始める方及び現在学んでいる人。途中で、いやになり止めたいと思った時、種々事由もありましようが、思い出して欲しい“諺”があります。「孟母断機」の教えです。「孟母三遷」は良く知られてますが。「断機」は孟子の母が「織りかけの織布を断って、学問を途中でやめればこの断機と同じだ」と孟子を戒めた故事です。

始めたのですから途中で止めないで欲しいのです。今まで学んだ時間と費用が無に帰して終わります。残念です。教えている先生もガッカリ致します。自分一人の問題でないのです。クラスメートにも影響が及ぶのです。

止めないためのストッパーは「中国語に惚れること。あの中国語の金属的な響きの美しいメロデーの言葉に魅せら

れて欲しいのです」それには何回も聴き、自分で何度も音読し四声を正確に発音する癖を付けることだと思います。「読書百遍意自ら通ず」です。

更に言うなら、初め「言葉ありき」で語学は生活・文化等の道具なのです。

その先にある「もの」が大切なのです。この道具を使って大きな“もの”を得て欲しいのです。中国の友と知り合い4千年の歴史ある中国文化を深く知って欲しいのです。

民間外交の草の根運動で日中友好に努めて下さい。私達の文化は昔、中国大陸から渡って来たものを源に花を咲かしたものです。

独りでは弱気になる時もあるかも知りませんが、皆で手を取り合って一步一步進みましょう。

思い出しました。2005年1月4日に亡くなられた「陳真先生」平成5年3月までNHKの「中国語ラジオ・テレビ講座」で講師しておられた美しい日本語も話す方です。その陳真先生が帰国される時に私達に“滴水穿石”の言葉を教え残されたのです。

「ミンミン、父との旅路」訳者です。

*dī shuǐ chuān shí*

滴水穿石 「雨だれ石をうがつ、微力でもたゆまず続けければ成就する」

毎日一滴一滴ずつ続けて行けば、決らず大きな石も砕く成果が現れます。



陳 真 (ちん・しん)

中国北京放送大学特任教授。

1932年生まれ。1973年から90年まで北京放送で日本向け中国語講座を担当。1991年からNHKのラジオ・テレビ中国語講座講師を務める。中国放送学会副会長・国際放送学会理事。

初次见面！星期二班 山口です。

私にとって中国と言えば「万里の長城」「謝謝」「大地の子」くらいのものでした。

ただ、近所にあるとてもおいしい中華料理店の店主に「おいしいよ」と中国語で言いたいと思った事が、中国語を始めるきっかけの1つです。(恥ずかしい・・・)

この火曜クラスは、何度も中国に旅行されている方をはじめ、中国語の経験者、そして入門レベルの私があります。

去年の四月ごろは、ピーインが大事なのはわかるけどどうまく発音できず四苦八苦し、今は予定課程の3分の1が修了したところです。

そして、“很好吃”第1目標達成!!

でも今は少しですが、もっと話せたらと欲が出てきました。

ここまで頑張れたのは、李老師のおかげです。

何度も同じ質問や、トンチンカンな質問をしていますが(わが子が同じ事をしたらゲンコツの一つもあげるところですが)丁寧な解答を根気よく教えていただき、感謝しています。

何十年ぶりに暗記し、勉強していますが、まだ楽しい教室と感じているのが私にとって幸いです。

落ちこぼれ気味な私ですが、みなさん“请多关照”“謝謝”



## 日本不是东京

最近こういう題名の本を読み始めた。この本は中国の主婦「王梓」という方が書いた日本見聞録である。

日本文を読むときは少々意味があいまいでも先に読み進む。しかし汉语の課本で育った私にとって意味や読み方不明な文字に出くわすと、とことん辞典を査(chá)して(ルー・大柴流で)しまい遅遅として先に進まない。

つまり彼女の言わんとするところは「東京不是日本、真正的日本是在乡下」東京だけを見てこれが日本だと思いきんではいけません、本当の日本の姿は地方にあるのです、と言っているようだ。彼女は日本各地を旅して、その自然・風景や人間の営み、風俗習慣などを外国人の目を通して紹介をしている。

## 你去过中国吗?

我去过。と答えると、中国のどこへ行きましたか?最近の北京へ行った人はこう言うかも知れません。「街中が建設ラッシュで活気に溢れ、公衆トイレは綺麗だし、王府井の賑わいは・・・」などと絶賛するでしょう。

だが、ちょっと待ってください。故宮の北の方、安定門地区にある古い鼓楼に登って下を見てご覧なさい。古い北京を象徴する胡同が開発の名のもとに無残にも取り壊され、その跡が累々と広がっています。オリンピックが決まる前までは胡同の狭い路地裏で庶民がひっそりと暮らしていたのだ。権力には抗しきれずに追い立てられた人はどこに行ってしまったのか。

## 天安門広場のおのぼりさん

いつ行ってみても広場の人の多さにはびっくりする。どこからでてきたのだろうか。あるとき私は地下鉄に乗ろうとして近くの人に尋ねた。「请问，地铁车站在哪儿?」すると「不知道!」というそっけない返事。故宮あたりをうろちよろしている人の殆んどは「おのぼりさん」なのだから知らなくて当然なのだ。

## 発展する上海

上海の変貌はさらに目覚ましいようだ。私が行ったのは南京路がまだ歩行者天国(車両進入禁止)になる前のことだからかなり昔のことだ。歩道に溢れた人達は車道にはみ出し、クラクションが間断なく鳴り響く。道路を横切ろうとする人で歩道橋も押し合いへし合いちっとも前に進まない。この群衆の8~9割は買物や観光のために近郊からやってきた田舎者なのだとされている。

あなたが初めて中国をそして上海を訪れたとしたらなんと言って中国を紹介するでしょうか。

## 盲人摸象(máng rén mō xiàng)

という成語がある。「群盲象をなでる」などと訳されている。

中国は広い、中国の人口は桁外れに多い。そのような国を僅かな接点だけで評するのは極めて危険ではないかと思う。「北京不是中国」だ。

## 田舎めぐり

私は中国の大都市もそれなりに興味をそそられる。しかし大都市は日本の街と似かよったところがあって、あまり新鮮味を感じない。そんな訳で私の中国旅行は田舎まわりが多くなってきた。例えば、世界遺産めぐりとか三峽クルージングとか、三国志の遺跡を訪ねる旅などは全く眉唾もののツアーだがそれなりに楽しんでいる。九寨溝や黄龍の自然はすばらしかった。明代の城壁や町並みがそっくり残っている平遥は印象深い。黄山の景色は筆舌に尽くし難い。荒れるにまかせ崩れ落ちそうな昔の長城を見るために張家口まで車を走らせたこともあった。

若い人にはあまり関心がないだろうが旅順郊外には日露戦争の遺跡、203高地とか、水師営には日本人観光客のために昔風の会見所が再建されていた。高齢者にとっては本当にたまらなく懐かしいところである。

(左ページに続く)

## 田舎ホテルでの失敗談

フェースタオルもバスタオルも茶色がかってゴワゴワ。トイレの水はチョロチョロと音をたてて流れ続ける。部屋に塵箒が無かったので洗澡間の箒を持ち込んだ。だが翌日はまた元の位置に戻されていた。つまりトイレのちり紙は水に溶けにくく流せないの、使用後はこの箒に入れておくのだという。知らないということはおそろしいことだ。

### 酸欠の入った風船

今では九寨溝への観光は飛行機でひとつ飛びだが平成13年はバスで行くしかなかった。臥龍のパンダセンターで野生のパンダを見て、子パンダを抱っこして記念撮影。それから黄龍を目指して330キロの山道を走る約8時間。

岷山山脈の峠を越える。標高は4000米、辺りは一面の雪、主峰「雪寶頂」は5588米だという。峠からやや下ったところにある「華龍山荘」が宿だ。部屋に入ると一抱えもある大きなバルーンが置いてある。気分が悪くなったら吸うための酸素が入っているのである。富士山より高いのだから必要なのだろう。

### 田舎のトイレ

トイレについての風評は聞いたことがあると思う。田舎道を走っているとトイレに困ることが多い。運ちゃんも心得たものでガソリンスタンドや小さな店を見つけては利用させてくれる。

まあなんとか我慢できる場合もあるが、ブロックをコの字形に積んだだけの男性用の設備は外からは目隠しされているものの中はぐしゃぐしゃ。

谷川の上に突き出したように設けられたものは、穴の下は断崖絶壁。足がすくんで出るものも引っ込んでしまう。

囲いも扉も無い「ニイハオトイレ」入っていくとすでに用便中の人がいるので「你好！」。

困り果てたおば様たちは、たまりかねて近くの草むらへと走る。だがご用心、先人の残した遺物が点在するから踏まないようにと気が抜けない。北京の公衆トイレだけがトイレではないのである。

## 真っ赤なほっぺ

地方へ行くと平屋建ての旅館もある。外から帰ってフロントに声をかけるとリンゴのような真っ赤なほっぺの小姐がニコニコしながら鍵束を持って走ってきて木製の扉を開けてくれる。彼女は少数民族の少女なのだろう。

設備は良くないがなにか心温まるような感じのする旅館である。

### チベット族の抗議行動が激化

3月14日、西藏自治区の省会「拉萨」で発生した党や政府に対する僧侶や市民の抗議行動が激化し、デモ隊と治安当局との衝突が報じられている。

チベットは1951年、中国軍が拉萨に進駐し中国に併合された。以来幾度となく中国支配に反発し、自治と独立を求める行動が起きていた。1959年にはチベット人が武装蜂起したが中国軍によって鎮圧されてしまい、ダライ・ラマはインドに亡命した。

自治区の人口は約280万人、うち9割以上がチベット人だと言われているが近年漢族の入植者が増え、富の大半を占めるに到り、ますますチベット族の反発を買っているという。

中国当局はこの反発を抑えるため色々な締め付けを強化していると報じられている。

私も各地でチベット仏教の寺を訪れたことがある。薄汚れたような袈裟をまとい、敬虔な修行をしている僧侶たちの姿を思い出すと、よほど耐え難い事情があるのではなかろうかと考える。

一回まわすと、経文を一度読んだことになるという「マニ車」。携帯できる小さなものから、寺に備えられている見上げるような大きなものまで、チベット仏教の象徴である。

チベット族の村に入ると、家々の屋根の上や道路・橋などに青・赤・白・緑・黄の五色の旗「タルチョ」がはためいている風景を思い出す。

この「你好」がお手元に届く頃には双方が満足する解決が図られていることを切に願うばかりである。

## 今は昔・・・ 星期三班 井上健三

1993年の春、松原公民館二階の会議室—黒板を背に艶やかな若松老師（先生）、それに向かって長テーブル二つを繋げて5列、40名近くの生徒たちが居並ぶ・・・まことに賑々しい勉強風景であった。使用していたのは「エッセンシャル中国語中級編」、A5版465ページの部厚いテキストで、私が入会したときには、296ページの「想・觉得・以为の用法」から始まった。“我没想到在中国能穿旗袍”・・・と会話の例文が12行続き、あと文法解説、練習問題あわせて12ページ。

教室いっぱいの大人達が男も女も口伝よろしく先生の発音に従って、順番に発音してゆく。そして今度はひとりずつの「念」——先生は相手に恥ずかしい思いをさせまいと優しく反復訂正する。そしてその合間の、かの地の風俗習慣、現代史と、聴き取れもしない中国語の講説をバイオリン独奏に立ち会うが如くにただうっとり聞き惚れるばかり。そんなわけで、その日は例文とその説明2ページで終わってしまった。

この時期、中国では三峡ダムの着工が決定され、さらに社会主義市場経済による改革開放路線をひたはしり始めた。その趨勢のなかで、多岐多岐の同学们のなかには、日中友好の役割を担って各地の大学の日本語教師に、また企業から中国への赴任、あるいは中国語入門書の出版、通訳へと雄飛した方が多い。

で、この私はというと——複座する機会のない愚鈍にして貧乏な学問僧の如く、ロレツのまわらなくなる前に、せめて漢詩文（文言）を中国音でよめるようになりたいものと思ってからすでに15年、いわば義務教育から大学までの年月をいったい何をしてきたのかと顔を赤らめるよりは——思い決して、古人も言っているではないか「楽しむに如かず」。

### 「にいはお」発刊10周年を振り返って 神山作市(編集者)

当会は発足以来26年（当時）の歴史をもちながら、クラスが三つに分かれているために会員相互の一体感が乏しいことに気付き、少しでも役に立てばと考えて発刊したのがこの「你好」です。

それから満10年、お陰様で今回第29号を発行することができました。

昔は教室内に座れないほどの同学が学んでおりましたが、近年市内にも中国語教室が林立し会員募集が困難になってまいりました。中山会長がいろいろな媒体を利用して会員の増加に努力をしておりますが、会員の私たちも機会を捉えては知人友人などに働きかけて入会を勧めてください。

さて「你好」も皆さんからの原稿が集まらなければ発行できません。偏った一部の執筆者がだけの原稿では毎号の内容が面白くなってしまいますので、多数の会員のご協力をよろしくお願いいたします。

その你好内容を中国関連に限定してまいりますと書きにくい場合もありますので、趣味や意見・感想・詩や俳句川柳などご自由に書いてください。

編者としては執筆者の意向を正確に紙面上に反映したいと考えております。従ってたとえば文章中に誤字などがあった場合でも敢えてそのまま打字することにしておりますので原稿はよく読み返してから提出してください。さらに句点（。）読点（、）などははっきりと表示してください。新しい段落に入る場合は改行し行頭を一字分下げしてから書いてください。

パソコンをご利用の方は原稿をフロッピーなどで提出していただくと助かります。ディスクはあとでお返しします。

写真はモノクロでコピーするので不鮮明となります。

勝手なお願いですがよろしく・・・